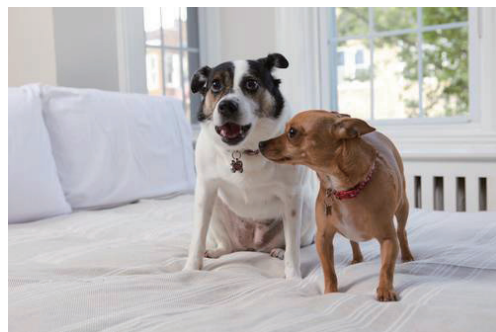
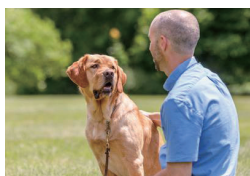


犬も椎間板ヘルニアになる？ 症状・原因・治療方法を解説

椎間板ヘルニアと聞くと、腰の痛みなどの症状を伴う人間がかかる病気を思い浮かべますが、実は、犬も人間と同様に椎間板ヘルニアになる可能性があります。犬の椎間板ヘルニアについて、症状・原因・治療方法などを詳しく解説していきます。



椎間板ヘルニアとは



椎間板ヘルニアとは、背骨の骨と骨の間にあるクッションの役目を果たす椎間板が、何らかの原因で、神経側に飛び出して脊髄（脊椎の中を通る太い神経）を圧迫してしまう状態を意味しています。犬の椎間板ヘルニアが起こりやすい部位は、腰椎・頸椎・胸椎が挙げられます。椎間板による神経の圧迫が数日続くと、神経は損傷し、進行すると疼痛や感覚異常、運動機能障害などが起こります。損傷した神経は、基本的には二度と再生されることはありません。

犬の椎間板ヘルニアの症状



①痛みを訴える

抱きかかえたときや、背中・首・腰などを動かしたときに声をあげて鳴く場合は、椎間板ヘルニアの痛みを感じている可能性が考えられます。

②麻痺の症状がみられる

椎間板ヘルニアが原因で、犬が自分の意志で身体の一部をまったく動かせなくなることを完全麻痺と呼びます。一方、力強く動かすことはできないものの、自分の意志で多少動かすことができる状態は不全麻痺と呼ばれます。

③自力排尿ができない

椎間板ヘルニアの症状が進行すると、自力排尿ができなくなる場合があります。尿が出ない、または垂れ流しの症状がみられる場合には、自力排尿ができなくなっている可能性が高いです。

④固有位置感覚に異常がみられる

固有位置感覚とは、自分の身体の部分が、どこにあるのかを認識する能力のことを意味しています。椎間板ヘルニアによって、この固有位置感覚に異常がみられると、立っているときや歩くときに、ふらつきや手足の引きずりなどの症状が出るようになります。

⑤浅部または深部の痛覚に異常がみられる

椎間板ヘルニアの症状が進むと、身体の表面部分に近い箇所には、痛みを感じにくくなります。たとえば、足先などの皮膚をつねった場合、通常であれば痛みを感じて反応しますが、浅部痛覚に異常がみられるケースでは、反応が鈍くなります。

犬の椎間板ヘルニアの予防方法



犬の椎間板ヘルニアは、遺伝による先天性のものは予防することは難しいものの、加齢による後天性のものは、筋力の衰え、太ることによる関節への負荷などが原因となるため、適度な運動と体型管理を行うことで、ある程度の予防が可能です。

犬の椎間板ヘルニアの治療方法

犬の椎間板ヘルニアの治療方法は、軽度の場合は鎮痛剤の投薬と安静がメインとなります。数週間、鎮痛剤を投与しながら安静にさせることで、症状の改善が見込めます。犬の椎間板ヘルニアの症状が重度の場合、投薬による改善は困難であるため、外科手術を行う必要があります。突出した椎間板を摘出する外科手術を行い、術後にはリハビリを実施します。

ノミ・マダニに関する最新情報をチェック!

☑ LINE 公式サイト LINE@友達募集中 →

